

式年遷宮による 地域への影響を振り返る



川曳(かわびき)

伊勢神宮では、2033年の第63回神宮式年遷宮に向けて、2025年から諸祭・諸行事が始まった。2026年と2027年には、伊勢市の住民(旧神領民)等がご用材を内宮・外宮に曳き入れる「御木曳行事」が行われ、伊勢のまちでは式年遷宮に向けた機運が一気に高まる。

20年に一度の式年遷宮の年は、他の年に増して全国から多くの参拝者が訪れる。その効果を地域経済に波及させるため、伊勢志摩地域では式年遷宮の年を見据えてインフラの整備やイベントの開催が行われてきた。本レポートでは、第60回から第62回の過去3回の式年遷宮時による地域経済への影響を振り返る。

1 神宮式年遷宮とは

神宮式年遷宮は、伊勢神宮において最も重要な祭事である。「式年」とは定められた年、「遷宮」とは「宮を遷す」の意味があり、伊勢神宮では20年に一度行われている。内宮・外宮の正殿や別宮だけでなく、鳥居や宇治橋など170を超える建物と、天照大御神の衣服や調度類などの「御装束神宝」714種1,576点が新調される。

式年遷宮の歴史は古く、第1回は持統天皇の時代、690年にさかのぼる。以降、室町時代などに中断されたこともあったが、1300年以上にわたって受け継がれてきた。20年に1度である理由は素木造りの社殿や萱葺屋根の尊厳を保つため、宮大工や神宝の調製などの伝統技術を継承するためなど、様々推測されているが定説はなく、20年に一度造り替えられることで、常に新しくみずみずしい社殿で、永遠に変わらないお祭りが行われ続けるこ

とに意義があるとされる。

式年遷宮は、8年余りにわたり33の諸祭・行事が行われる。第63回神宮式年遷宮は、2025年5月に新宮の御用材を伐採する御杉山の山の口に坐す神に伐採と搬出の安全を祈る「山口祭」が行われたことを皮切りに、2033年10月に大御神が本殿から新殿にお遷りになる式年遷宮の中核を成す「遷御」が行われ、同月に天皇陛下がお遣わしになった宮内庁楽師が御神楽を奉納し、遷宮諸祭が締めくくられる。

そのなかで、御用材を古式のままに両宮域内に曳き入れる「御木曳行事」と、新宮に御白石を奉納する「御白石持行事」は、旧神領民(伊勢神宮の領地内の住民で、現在は伊勢市の住民)による行事で、伊勢のまちがひときわ賑やかとなる。第63回神宮式年遷宮の御木曳行事は、2026年と2027年の初夏から夏にかけて行われる予定で準備が進められている。

第63回神宮式年遷宮諸祭・行事予定表

| 年 | 祭名 | 内容 | 月 | 祭名 | 内容 |
|---------------|------------|--|---------------|---------|--|
| 2025年 5月 | 山口祭 | 新宮の御用材を伐り出すに当たり、御杉山の山の口に坐す神に伐採と搬出の安全を祈る | 7月 | 鶯祭 | 御正殿の萱も葺きおわり、金物を打つお祭り |
| | 木本祭 | 御正殿の御床下に奉建する心御柱の御用材を伐採するに当たり、その木の本に坐す神を祀る | 2033年 7~8月 | 御白石持行事 | 伊勢の住民(旧神領民)が新宮に御白石を奉献する行事 |
| 6月 | 御杉始祭 | 御用材を木曾の御杉山で正式に伐り始めるお祭り | 9月 | 御戸祭 | 御正殿の御扉を立てるお祭り |
| | 御樋代木奉曳式 | 御杉山で伐採された御樋代のための御料木を、内宮と外宮の域内の五丈殿前に曳き入れる儀式 | | 御船代奉納式 | 御神体のお鎮まりになる「御船代」を刻み、御正殿に奉納する |
| 9月 | 御船代祭 | 御樋代をお納めする器である「御船代」の御料木を伐採するお祭り | | 洗清 | 新殿の竣功に当たり殿内と殿外を洗い清める儀式 |
| 2026年 4月 | 御木曳初式 | 御杉山より伐り出された御用材を、内宮と外宮の両宮に曳き入れる伝統行事 | | 心御柱奉建 | 心御柱(正殿の御床下に建てられる特別な御柱)の奉建は、遷宮諸祭の中でも一際重んじられる秘儀 |
| | 木造始祭 | 御造営の工事を始めるに際し、執り行われるお祭り | | 杵築祭 | 新殿の竣功を祝い、大宮処を撞つき固めるお祭り |
| 5~7月 | 御木曳行事(第一次) | 伊勢の住民(旧神領民)と全国の崇敬者により、御用材を古式のままに両宮域内へ曳き入れる盛大な行事 | 10月 | 後鎮祭 | 新宮の竣功に際し、御正殿の床下に天平盆を奉居するお祭り |
| 5月 | 仮御樋代木伐採式 | 「遷御」の際に御神体を納める「仮御樋代」の御用材を伐採するに当たり、木の本に坐す神をお祀りし、忌斧を入れる式 | | 御装束神宝読合 | 天皇陛下より大御神に献げられる御装束神宝を、新宮の四丈殿において、目目に照らし読み合わせる儀式 |
| 2027年 5~7月 | 御木曳行事(第二次) | 伊勢の住民(旧神領民)と全国からの特別神領民により、御用材を両宮域内へ曳き入れる盛大な行事 | | 川原大祓 | 遷御の前日、仮御樋代・仮御船代や御装束神宝を始め、遷御に奉仕するすべての奉仕員を「川原祓所」で祓い清める儀式 |
| 2028年 4月 | 鎮地祭 | 新宮を建てる新御敷地で行われる最初のお祭りで、造営作業の安全を祈り大宮処に坐す神を祀る | | 御飾 | 遷御当日、新調された御装束で殿内を装飾し、大御神にお遷りいただく準備をする儀式 |
| 2029年 11月 | 宇治橋渡始式 | 内宮の入口に架かる宇治橋も架け替えが行われ、古式ゆかしく渡り始めが行われる | | 遷御 | 大御神が本殿から新殿へとお遷りになる式年遷宮の中核をなすお祭り |
| 2032年 3月 | 立柱祭 | 御正殿の建築はじめに際し、御柱を建てるお祭り | | 大御饌 | 遷御の翌日の早朝、新殿において初めて大御神に神饌を奉るお祭り |
| | 御形祭 | 御正殿の東西の妻の束柱に円形の図様を穿つお祭り | | 奉幣 | 遷御とともに一際重んじられてきたお祭り。天皇陛下より奉られる幣帛を奉納し、その後五丈殿で饗膳の儀が行われる |
| | 上棟祭 | 御正殿に棟木を上げるお祭り | | 古物渡 | 古殿内の神宝類を新宮の西宝殿に移す儀式 |
| | 檐付祭 | 御正殿の御屋根の萱を葺き始めるお祭り | | 御神楽御饌 | 御神楽を執り行うに先立ち、大御神に神饌を奉るお祭り |
| | | | | 御神楽 | 新宮の四丈殿において、天皇陛下がお遣わしになった宮内庁楽師が御神楽を奉納 |

2 神宮参拝者数・宿泊者数の推移

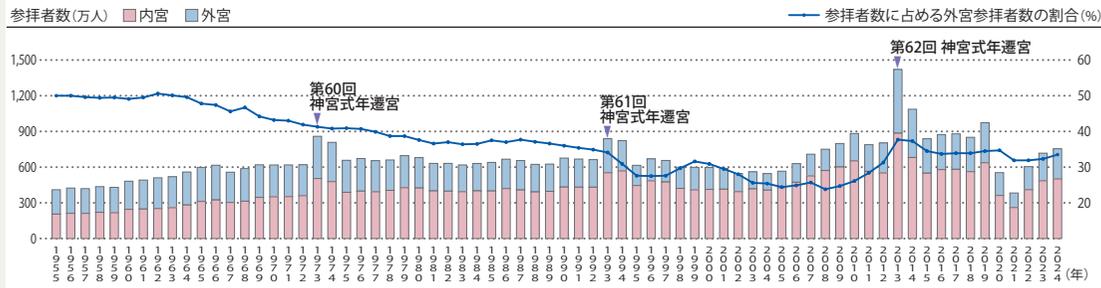
1 神宮参拝者数の推移

伊勢神宮の参拝者数は、戦後の混乱期に落ち込んだ後、1969年から1997年までは概ね600万人台で推移したが、第60回神宮式年遷宮の年(1973年)と第61回神宮式年遷宮の年(1993年)、それぞれの翌

年(おかげ年)は大幅に増加し、800万人を超えた。

1998年から2005年は、500万人台に落ち込んだものの、御木曳行事が行われた2006年以降徐々に増加し、2013年の第62回神宮式年遷宮の年は1,420万人と過去最多の参拝者数となり、おかげ年の2014年も一千万人を超えた。以降も「第42回主要国首脳会議(G7伊勢志摩サミット)」「(2016年)や「第27回全国菓子大博覧会・三重(お伊勢さん菓子博)」「(2017

神宮参拝者数の推移



資料：伊勢市「令和6年伊勢市観光統計(資料編)」

年)等の開催が相次いだほか、2019年は改元の年となったことなどから伊勢志摩地域への注目度は上がり、参拝者数は800万人から1,000万人弱で推移した。ただ、2020年・2021年はコロナ禍で大幅に減少し、その後持ち直したものの2025年は773万人にとどまっている。

内宮と外宮の参拝者数をみると、1960年代の半ばまでほぼ同数で推移していたが、以降は内宮の参拝者数が増加する一方、外宮は横ばいで推移し

た。第61回神宮式年遷宮後の1995年以降はさらに差が開き、神宮参拝者数に占める外宮の参拝者数は3割を下回る状況が続いた。第62回神宮式年遷宮に向けては、古くからの風習とされる「参拝は外宮から内宮へ」との参拝手順の広報活動の強化や、外宮参道の賑わいづくり等を通じて、外宮参拝者数の回復に向けた取り組みが進められた。その成果もあり、やや回復したものの、2025年は253万人と3割強にとどまっている。

宿泊者数の推移



資料：観光庁「宿泊旅行統計調査」

2 宿泊者数の推移

観光庁「宿泊旅行統計」によると、第62回神宮式年遷宮の年である2013年の三重県の延べ宿泊者数は969万人泊となり、現在の調査形式となった2011年以降で最多となった。2011年比で約1.3倍、2012年比で約1.2倍となり、全国の伸び率より大きかった。

なお、G7伊勢志摩サミットの開催が決定した2015年、開催された2016年についても、開催地である志摩地域や開催会場となった宿泊施設等に注目が集まったことなどにより宿泊者数は増加した。

3 過去の式年遷宮時の整備状況

前述の通り、式年遷宮の年には他の年に比べて多くの参拝者が訪れる。そのため、伊勢志摩地域を中心に、式年遷宮の時期に併せて交通網や宿泊施設・観光施設等が整備され、大規模イベントも開催されてきた。

ここでは、過去の式年遷宮の時代に、県内でのようなインフラ整備やイベント開催が行われてきたかを振り返る。

1 第60回神宮式年遷宮(1973年/昭和48年)

高度経済成長期を迎え、東京オリンピック(1964年)、日本万国博覧会(大阪万博 EXPO'70)(1970年)と世界的大規模イベントが相次いで開催され、戦後からの日本の復興と経済成長を示した。併せて、新

幹線(東京駅~新大阪駅)の開通、名神高速道路を始めとする高速道路の整備など、全国的に鉄道網や道路網などのインフラ整備が飛躍的に進んだ。

また、大阪万博から伊勢志摩地域への誘客を目的に、大阪万博の開催にあわせて、伊勢志摩地域の鉄道網や道路網の整備が進められるとともに、志摩地域を中心に観光施設も次々に開業した。スポーツの全国大会の誘致も進められ、それらは3年後の第60回神宮式年遷宮をも見据えた取り組みとなった。

1 鉄道整備

1970年に近鉄鳥羽線(宇治山田駅~鳥羽駅)の開通、ならびに志摩線(鳥羽駅~賢島駅)の広軌化改良が行われ、名古屋、大阪、京都から賢島まで直通で特急列車の乗り入れが可能となった。

2 道路整備

1973年にパールロードの鳥羽~磯部間、1976年に磯部~阿児間が開通し、鳥羽市南部の観光推進の一躍を担った。また、1975年には三雲町(現松阪市)と伊勢市を結ぶ国道23号線南勢バイパスが開通し、伊勢市街を通らずに内宮まで行けるようになり、交通渋滞の緩和に効果をもたらした。

3 施設整備

1967年に「合歓の郷(現NEMU RESORT)」、1969年に「賢島カントリークラブ」、1970年に「志摩マリンランド」(2021年廃業)など、志摩地域を中心に宿泊施設や観光施設等が相次いで開業した。

4 イベント開催

伊勢市の県営陸上競技場を主会場として、1973年に「全国高等学校総合体育大会」、1975年に「第30回国民体育大会秋季大会(みえ国体)」、「第11回全国身体障害者スポーツ大会」が開催された。

2 第61回神宮式年遷宮(1993年/平成5年)

1988年に、「総合保養地域整備法(リゾート法)」*1に基づいて策定された「三重サンベルトゾーン構想」*2が第一号として承認を受けたことを機に、伊勢志摩地域以南のリゾート開発が一気に進めら

式年遷宮が地域に与える影響

当社が第62回神宮式年遷宮後の2014年5月に三重県内の宿泊施設に実施したアンケート調査(回答165件)では、施設にとって式年遷宮の影響が「大いにプラス」あるいは「プラス」と答えた割合はあわせて(以下「プラス」)県全体で6割弱、中勢地域では約7割、南勢地域では7割半ばを占めた。

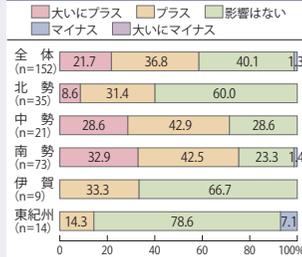
また、売上高・利益においても、県全体で5割強の施設が「プラス」と回答した。

回答施設が立地する地域への影響では、南勢地域で8割弱、中勢地域で7割弱、伊賀地域で5割、北勢地域で4割弱、東紀州地域で3割が「プラス」と回答した。

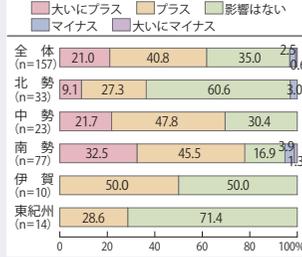
宿泊施設における式年遷宮の効果は大きく、また県内の幅広い地域に広がったことがうかがえる。

さらに式年遷宮に向けた投資や取組みでは「建物・施設の改装・リニューアル」や「従業員の増員」などに取り組んだ施設がそれぞれ2割程度あり、投資や雇用の促進にもつながった。

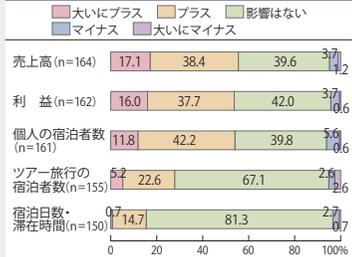
施設への影響



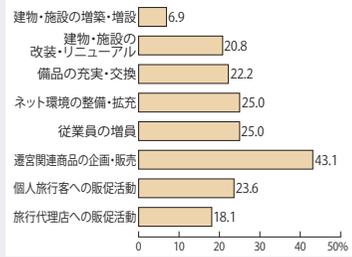
地域(施設が立地する地域)への影響



施設への具体的な影響



施設で行った投資や取組み (n=72)



れた。バブル景気も追い風に、数多くの観光施設・宿泊施設が整備されると同時に、高規格道路・幹線道路の整備が進み、現在に続く観光地としての基礎固めが行われた。

- *1 国民が余暇を利用して滞在しつつ行楽・スポーツ、レクリエーション、教養文化、休養等の様々な活動のための施設・地域の整備を民間活力を生かして促進し、ゆとりある国民生活の実現、地域振興を図ることを目的として制定。
- *2 伊勢志摩、東紀州地域をサンベルト地域として位置づけ、21世紀に向けて海洋性を基調とした滞在・周遊型の国際的なリゾートゾーンとして整備を進めることで、ゆとりある国民生活の実現、地域の活性化、県土の均衡ある発展を図る構想

①道路整備

1993年に伊勢自動車道の勢和多気IC～伊勢IC間が開通し、関JCT(伊勢関IC)から伊勢ICまでが全線開通した。

また、1994年には、国道23号線南勢バイパスの全線及び国道42号線の一部(伊勢～二見)の4車線化になった。さらに、伊勢自動車道に直結する伊勢二見鳥羽ラインが開通した。これにより、国道42号線等の交通渋滞の解消や伊勢市から鳥羽市へのアクセスの向上につながった。

②施設整備

1993年、二見町に「伊勢戦国時代村(現ともいき



おかげ横丁

の国 伊勢忍者キングダム)」が開業した。また、内宮のおはらい町の中ほどに、おかげ参りの時代(江戸から明治期)の伊勢路の伝統的な街並みを再現した「おかげ横丁」が誕生した。

志摩市には、会員制の別荘村として「志摩地中海村」が開業、現在はリゾートホテルとして運営されている。

1994年には、1990年に第一期部分が開館していた新鳥羽水族館の全館が完成した。また、志摩市にはリゾート開発の中核施設として、テーマパーク「パルクエスパーニャ」とリゾートホテル「ホテル志摩スペイン村」が一体となった「志摩スペ

イン村」が開業した。

③イベント開催

1994年には、三重県初となる国際イベント「世界祝祭博覧会(まつり博・三重'94)」が開催された。

③ 第62回神宮式年遷宮(2013年/平成25年)

第60回神宮式年遷宮、第61回神宮式年遷宮と比較すると、鉄道網や道路網などの目立ったインフラ整備は少なかった。一方で、式年遷宮後に参拝者数が落ち込むことや、外宮参拝者数が内宮に比べて少ないことなどの問題改善に向けて、外宮参道の整備が進められた。

また、式年遷宮を後世に伝えるため「式年遷宮記念 せんぐう館」の開館や、美しい映像を多用したホームページやSNSでの発信など、伊勢神宮からの情報発信も多く行われた。

出雲大社(鳥根県)の「平成の大遷宮」と重なったことやパワースポットブームを背景に、伊勢神宮や式年遷宮をテーマにしたメディアでの発信も相次ぎ、2013年の参拝者数は過去最多を記録した。

①交通整備

交通においては、乗客の利便性や快適性を重視した新型車両等の運行が目立った。

近畿日本鉄道株式会社では、2011年にクラブツーリズム専用列車「かぎろひ」を運行、2012年に「伊勢志摩ライナー」をリニューアルした。さらに2013年には、「乗ること自体が楽しみとなる」をコンセプトに、大阪難波駅及び近鉄名古屋駅と賢島駅を結ぶ観光特急「しまかぜ」を運行、現在では



外宮参道

京都駅間も運行している。

また、三重交通株式会社は、明治時代から昭和30年代まで市内を運行し、参宮電車として親しまれていた路面電車「神都線」をモデルとした「神都バス」の運行を開始した。

②道路整備

「第二伊勢道路」が「伊勢志摩連絡道路」の一部として整備された。鳥羽市白木町から伊勢市二見町松下に至る道路で、交通量の分散化とともに、志摩地域へのアクセス・周遊性の向上が図られた。また、伊勢市街地における交通渋滞の緩和を目的に「伊勢南北幹線道路」が開通した。

③施設整備

2012年、外宮敷地内に「式年遷宮記念 せんぐう館」が開館し、御装束神宝の調整工程などが初公開された。

また、外宮参道には「赤福」や「豚捨」など伊勢市内の食の老舗企業が出店したほか、参道で長く営業している「伊勢せきや」が移転開業した。さらに、若者が楽しめるおしゃれな飲食店やテイクアウト店も増えた。

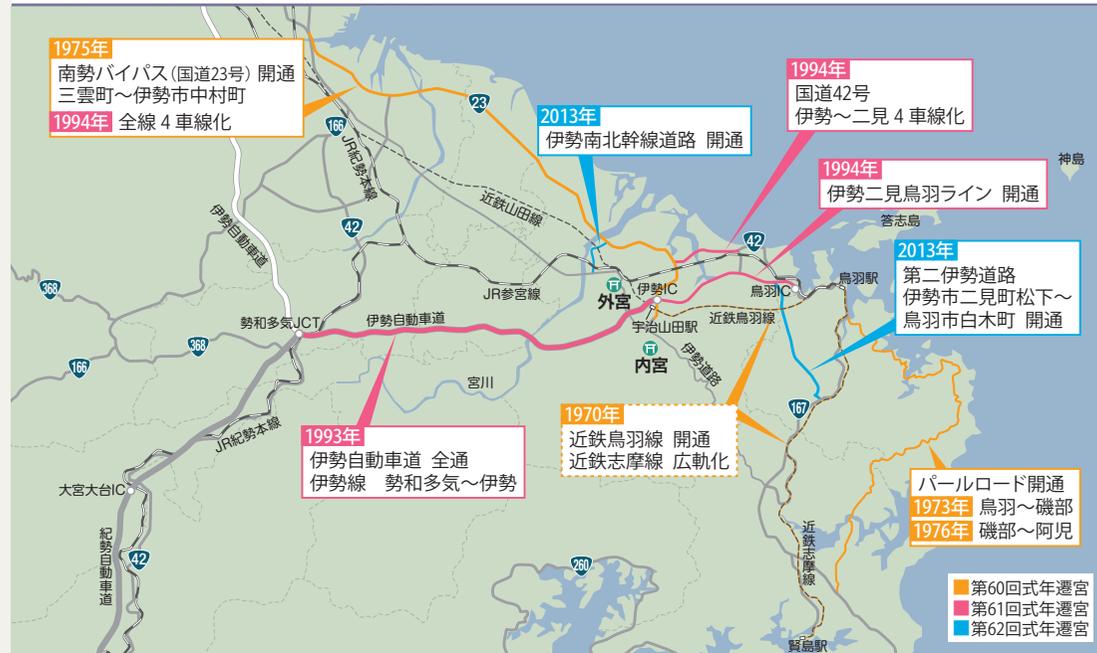
2013年にはJR伊勢市駅前に、温泉旅館「伊勢外宮参道 伊勢神泉」が開業した。JR伊勢市駅の外観や駅前ロータリー等の周辺も整備され、外宮までの参道沿いの景観の改善、賑わいの創出につながった。

④環境整備や取り組みの傾向

第60回神宮式年遷宮と第61回神宮式年遷宮の時には、高度経済成長期からバブル期にかかる時代背景もあり、鉄道や道路のインフラ整備が進み交通網が格段に発達した。同時に誘客や滞在に向けた観光施設・宿泊施設の整備も進められた。それらを通じて、伊勢志摩地域を訪れる観光客の受け入れ環境が整備、改善されるとともに、地域住民の生活環境の向上にも資することとなった。また、大型イベント等の開催を通じて集客を図る取り組みもみられた。

インフラが一定充足していた第62回神宮式年遷

神宮式年遷宮と主な道路・鉄道整備の状況



宮時には、「式年遷宮以降も継続して訪れてもらえるまちづくり」に向けた取り組みに力が置かれた。伊勢神宮や式年遷宮の理解を深めるとともに次世代に式年遷宮をつないでいくための情報発信や、外宮参道沿いの整備を通じた活性化が図られ、ハード面だけではなく、ソフト面の充足も図られた。

4 まとめ

2026年初夏に始まる御木曳行事に向けて、伊勢市内ではご用材を曳く奉曳団が結成され、準備や練習に余念がない。祭事である式年遷宮のなかで、市民が参加できる数少ない行事の1つである御木曳行事は、伊勢市民にとって特別な機会であり、参加できることは喜び・誇りでもあるとされる。

遷御まで7年余り。これから増加が見込まれる参拝者を、地域における経済効果の拡大につなげていくために、受入環境の整備や情報の発信等、様々な取り組みが官民連携のもと行われていくだろう。

すでに始動している取り組みもある。公益社団法人伊勢志摩観光コンベンション機構では「いせしませんぐう旅」と銘打ち、自治体や観光団体、民間事業者と連携して、大都市圏での誘客プロモーションや域内事業者によるコラボ商品づくり、周遊キャンペーン等を展開している。

近鉄グループホールディングス株式会社では、2025年に発表した「近鉄グループ長期ビジョン2035」の重点戦略のなかで、第63回神宮式年遷宮やリニア中央新幹線の開業等を見据えて「伊勢志摩エリアのブランド力強化」を掲げており、情報発信を含むエリアマーケティングやプロモーション体制の構築、観光コンテンツの整備等を進めることで地域の磨き上げと交流人口の増加を図ることとしている。また、伊勢市内に宿泊施設の立地が検討されるなどの動きもみられる。

一方で、2033年はゴールではない。効果をひと時で終わらせるのではなく、地域で稼いで地域に

還元していく仕組みを構築し、その好循環により持続可能な地域にしていくことが必要だ。そのためには、ハード面の受入環境だけでなく、ソフト面の充足が必要である。

■地域の価値の向上

伊勢神宮は神社であり、観光資源ではないが唯一無二の資源である。「せんぐう館」の展示資料や伊勢神宮のウェブサイト、また関連書籍などを通じて、伊勢神宮を学ぶ機会は増えたものの、理解を深めたり体感できたりする機会や場所は多くないように思う。

伊勢神宮や式年遷宮を分かりやすく伝える仕組みの1つとして、伊勢神宮を軸に背景(地域が持つ歴史や文化)を語ることができ、旅行者の疑問やニーズに対応できるストーリーテラーの育成が重要と考える。また、伊勢神宮を核に関連資源も含めてストーリー化するとともに、伊勢神宮の「本質」を提供できるコンテンツの造成を検討することは意味があると考え。例えば、神様の食事である「神饌」や「唯一神明造」の建築方法などをテーマに、携わっている人から作り方や取り組む姿勢、また材料を調達する地域の営みなどを学ぶ機会などが考えられる。

コアな層をターゲットに、伊勢神宮の歴史や文化、それを取り巻く豊かな自然環境、そこから生み出される食や生業、風土への理解を深める機会を提供する。それにより、地域ブランドの向上につなげ、旅行者の消費単価や消費の機会を増やしていくことが可能と考える。また、知りたいとのニーズに応え続けることで根強いリピーターづくりにもつながることが期待される。

■受け入れ層の拡大

インバウンド等の受け入れ層の拡大を図っていくことも重要だ。そのためには、情報発信やプロモーションを効果的に行っていく必要がある。観光に携わる団体が多いと、多様な媒体で発信できるメリットがある一方、体裁にばらつきがあるな

ど統一感に欠ける面もある。発信方法や時期、内容、媒体などを組織間で共有し、ターゲット層に厚みのある情報として“伝わる”ことが重要である。

2025年に訪日外客数が過去最高を記録したものの県内への来訪は少ない状況であり、三重県としても誘客に注力する方針を打ち出している。空港を持たない三重県においては、訪問してもらいやすい環境整備が不可欠だ。そのためには、交通手段の整備以上に、訪問地までのアクセス

を分かりやすく伝える情報の整備が重要だ。案内板を多言語に翻訳するだけではなく、乗り換えの方法や乗り換えの場所を分かりやすく明示することが大切だ。また、場合によっては交通事業者や自治体が連携して、乗り換え場所を利便性が高い場所に移動することや、複数の交通事業者の時刻表や乗り換え案内などの情報を一元化することなどを検討する必要があるだろう。

その前段には“訪れたい”と思ってもらえる地域づくりが必要で、魅力的なコンテンツや快適に滞在できる宿泊・観光施設等の充足が欠かせない。

なお、インバウンドの受け入れ促進は必要だが、日本人旅行者に訪れ続けてもらえる場所であることが重要なことは言うまでもない。多くの日本人にとって、伊勢神宮は「お伊勢さん」と親しみを込めて呼ばれる「心のふるさと」であり、伊勢志摩地域は「一度は訪れたことがある旅行地」である。今一度、心のふるさととして戻る場所、節目に訪れる場所と認識してもらうための意識醸成も重要ではないだろうか。

■地域住民の生活に配慮した安全安心な観光地づくり

観光客の著しい増加により、北海道や京都など一部の観光地では、通渋滞や騒音、私有地への無断侵入など地域住民の生活に悪影響が及ぶ「オー



陸曳(おかげ)

バーツーリズム」が問題となっている。持続可能な地域づくりに向けて、地域住民の質の確保は必要不可欠であり、観光振興は来訪者だけでなく、地域住民の生活にも資するものとなることが重要だ。そのためには、地域におけるマナーや規則を定めて来訪者に粘り強く伝え続けるとともに、地域住民にも観光振興の意義を周知し続けることが必要だ。それにより、地域住民が地域の価値を再認識するとともに、受入意識の醸成が図られていく。

また、自然災害などの危機への備えも重要である。古くから観光客を受け入れてきたことや、G7伊勢志摩サミットの開催地であることなどから、伊勢志摩地域は来訪者を安心安全に受け入れることができる地域として一定の評価がある。一方で、近年は自然災害が多発、激甚化していることや、新型コロナウイルスのように従来では対応しきれない事象も発生しており、災害対応に向けた体制の見直しや地域間連携の必要性がますます高まっている。

何より重要なことは、式年遷宮の時だけでなく地域として継続的に取り組むことである。人々に心を寄せ続けてもらえる場所、訪れたいと思われる地域であるとともに、地域住民にとって誇りをもてる地域であり続けることが大切である。

(山崎 美幸)